No.33
2007. 12. 01

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

●森の民はどこへ……1
●Hope of Phnom Chiso……2～3
●カンボジアシルクでファッションショー……3
●ネパールSOARSニュースあ・ら・かると……4
●お人好し「タマン族」を応援したい！……4
●村の森の将来を担う“森林ボランティア”……5
●ブランチから……6
●秋の「地球の木カフェ」開催……6
●一歩ふみ出そう私のシンプルライフ……7
●グローバルアイ「南北統一に向けた韓国の平和運動」……7
●活動日誌……7
●INFORMATION……8

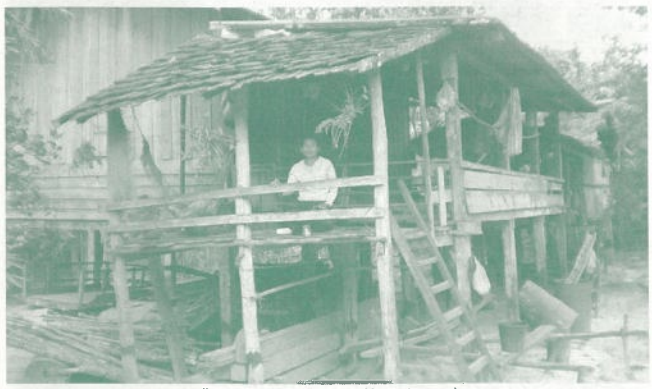
ラオス現地調査報告（10/28～11/04）

森の民はどこへ……

副理事長
ラオスチーム　武安　ますみ

3年前初めて訪れたラオス中部カムアン県のナカイヌア村を、10月末再訪した。村の風景は前と同じだが、この12月に村全体が移転するのだという。この村は、国の巨大プロジェクトであるNT2（ナムトゥン2）ダム計画により湖に沈む18の村のひとつ。先祖代々受け継がれてきた水田や森に依存する生業を、移転先では、「魚捕り」「サービス業や労働者としての仕事」「野菜や果樹を売る」などに転換することになる。

集会所に集まった村人たちは、前回のような不安を口にするのではなく、もう決まったことに対して少しでも希望を見い出そうと努力をしているようであった。女性同盟のブンペンさんは私のことを覚えていて、同い年だということも判明し、他人とは思えない親しみが湧いた。300年続いたというこのナカイヌア村は、2ヶ月後には誰もいなくなる。その「語り継ぎたい風景やもの」を村人の目線でカメラに収めてもらい、アルバムにして渡そうと、3つのグループに分かれ村の中を歩いた。自分の家の前に寂しそうに立つ元兵士、小さな家の軒先にしゃがんでいる一人暮らしのおばあさん、脱穀作業をしている女性、ブンペンさんのお父さんの家など。次期村長プーカムさんは、小さい頃周りでよく遊んだという大きな木と一緒にカメラに収まった。どれもこれもかけがえのない宝物だ。


ブンペンさんのお父さんの家

ブンペンさんと筆者

2番目に訪れたのは、ナタンドン村。現地駐在の尾崎さんによれば、ここの村人はとてもまとまりがよいのだという。米銀行も今年から開始し問題なく進んでいて、貯蔵量が増えたら村で分けたり、他の村への貸出しも考えているという。ラタン（籐）の苗の栽培も順調。みんなで作った柵の中に15センチ程に育った苗がたくさん並んでいた。もう少し大きくなったら育てる意欲のある人に配るという。ラタン栽培の第一目的はなんと食糧、次に家具や小物となる。ホームステイ先は村長のお父さんの家で、照明からＴＶ、冷蔵庫、オーディオセット、引き込み電話まであった。だが、あいにく前夜の強風で電線が切れ停電、正真正銘のキャンドルナイトとなった。

この村では、「村の良いとこ探し」のワークショップを行った。「村にはあるけど、町には無いもの」やその逆を、書き出していく。村には森があり、お金が無くても何でも森から得ることができる／みんなで助け合っている／ストレスになる程の心配事はない。対して町（タケーク）には、きれいな家や車や高い値段の土地がある／隣同士の付き合いはあまりない／空気の汚染／感染症にもなり易い／ストレスも起きるなど。村人も村の良さをよくわかっているのだが、この村が今後どうなっていくのかは誰にもわからないと言う。

近代的な建物が増えた首都ビエンチャン。しかしひとつ横道に入れば、昔ながらの家と生活がそこにある。ダムに沈むナカイヌア村と、時代とともに変わっていくだろうナタンドン村。市場経済の発達とともに、経済的に豊かになった人だけが享受できる世界とそれに無縁の人々が生まれる。今回ラオスの村で街で、人々の明暗を見たような気がする。どこが分かれ目なのだろう。人々が考えているより速いスピードでグローバル化の波は押し寄せており、考える暇もないまま、大きな力に引っ張られていってしまう。どの道を選ぶにせよ、自分たちで選択できるよう、目に見えない大切なものを失わないよう、願うばかりだ。

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 広報部 ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp

カンボジア　タケオ州　現地調査報告（11月7日～11日）

Hope of Phnom Chiso（プノム・チソーの希望）

手織りシルクの小物制作への第一歩を踏み出す

上の題名は、カンボジア、タケオ州にある職業訓練センター[*1]で作る小物製品のブランド名である。11月9日、みんなで名前を考えようと、センターの先生、職員、生徒が集まって会議を開いたとき、生徒の間からプノム・チソーを入れたいという声が上がった。生徒たちにとって、プノム・チソーという地名は特別な重みを持っているようだ。ここにはカンボジアでも古い寺の遺跡があり有名で、プノム・チソー＝タケオなのである。

今回の職業訓練センター訪問の目的は、地球の木で販売する小物を、センターの裁縫クラスの子どもたちに作ってもらうことができるかを現地NGOであるVCAOと協議し具体化すること。ブランド名を決めること。日本でも売れるようなデザインを少し取り入れたショールをセンターで試験的に織ってもらうということであった。インストラクターのチーアさんとアイデアを出し合い、ポーチ、ポシェット、巾着、ブックカバーなど9点を発注した。布は、すべてセンターで織ったものを使う。

ショールについては、今年2月～3月調査時に同行した織物専門家、斎藤真理さんがデザインした。ラック[*2]、木の皮、藍などを使った自然染色でという注文なのだが、あいにくセンターの藍の木は枯れてしまったとのこと。やむなく青紫に化学染料を使うことを了承した。だが今後、藍を復活させてほしいと何度も伝えると、染色のトレーナーも盛んにうなづき、藍は体にもよいのだと熱く語った。

水が乏しいタケオで藍の木を枯らさずに育てること、面倒な藍染めをすることなど、藍は手間がかかる。その割には市場で価格に反映されにくい。消費者はよりくっきりした色の化学染料を好む。これらの理由から、生産者は藍から手を引いてしまう。化学染料の商品は巷にあふれているので、藍なら差別化ができる。しかも自然染料は身体にもよく、手間ひまかけて染めたという付加価値がつく。藍をはじめとした自然染料を使い、手織りとなれば、国際的にも人気のある商品になるはずである。

職業訓練センターに宿泊している子は、3月の5人から今回10人に増えていた。家が遠くて通えない子がセンターで暮らして織物や裁縫を習う。カンボジア滞在の最終日は日曜だったが、宿泊の子たちはショールを織り、ミシンを踏んでいた。この子たちは小学校を中退している場合が多い。制服や学用品、学校が遠いため通学の足となる自転車を買えない、昼食代がない、などから勉学を続けることができない。

真剣にデザインに合った布を決める

別れるとき、ピタッと抱きついてきた15歳の子がいた。両親とも亡くなり、兄弟姉妹4人が親戚に別れて預けられているそうである。子どもたちにセンターを出てからの夢を聞いたら、全員が織物をしたいと答えた。日々の生活で楽しいことも、織物とのことである。

現在、職業訓練センターの織物クラスには午前10人、午後12人、計22人（宿泊の子は午前・午後各1人として計算）。裁縫クラスには3人いる。

3月の調査時、8台ほどのミシンのうち、1台しか動いていなかった。その後30ドルで修理をしたが、また壊れたと言う。VCAO代表のチェア・ピデンさんと協議の結果、VCAOが職員から寄付を募って1台購入し、地球の木が1台購入することにした。裁縫に必要なモーター付きミシンは、中古の良品で230ドルとのことだ。（年末募金でこのミシン購入のための募金をお願いしています。）

「Hope of Phnom Chiso」の織物製品は、来年4月にはお目見え予定です。ぜひ事務所へお越しください。

＊1　職業訓練センター：日本のNGO、Love & Peace が建設、運営資金を送り、現地NGOのVCAO（Vulnerable Children Assistance Organization）が運営。貧困のため売られる危険度の高い子から入所し、午前か午後の授業後にセンターでショールの織物か裁縫を習う。

＊2　ラック：カイガラムシの分泌物から得られる天然樹脂。

裁縫クラスの生徒

常識がくつがえされた！

大学の法学部で子どもの権利について学んでいる会員の筒井早紀さんが、今回の調査に同行した。織物センターに一泊。センターの子たちとの交流やゴミ山を見学した。

織物センター[*3]の子どもたちの印象は？

早紀 みな仲良く、楽しそうだった。初め暗かった子がだんだん笑顔になると聞くと、センターは役に立っているのだと感じた。

幸せそうでも、内面は傷ついているとマネージャーは言っていましたね？

早紀 子どものことを調べに行ったので、現状を正直に話してくれてうれしかった。センターでは子どもたちが幸せになれるように気を配っていると聞いて、ここの子は恵まれていると思った。子どものことを真剣に考えているマネージャーや優しい織物の先生、しっかり向き合う裁縫クラスのチーア先生など、いい先生に恵まれている。

印象に残ったことは？

早紀 職業訓練センターに集まってきた近所の子の中に、年を聞いたらわからないと答えた子がいた。8歳ぐらいだろうけど母親がいないので生まれた年がわからないのだろうと、そばにいた人が言った。織物センターの女の子に指差し会話帳を見せて話そうとしたが、文字が読めないために何のことかわからない子がいてショックだった。ゴミ山では子どもの多さに驚いた。大人が工場で働くより、ゴミ拾いのほうがお金になるという社会の仕組みも……

うれしかったことは？

早紀 ゴミ山の学校の子たちはみんなかわいかった。織物センターではみんなに「お姉さん」と呼ばれ、「今日帰るんだよ」と言ったら、「あと一日いて」と言われたこと。

『子どもの権利』についてはどう思いましたか？

早紀 日本では学校に行くのが当然という環境にいた自分の目の前に、小学校中退の子がいる。「教育を受ける権利」があると言うけれど、学校へ行きたいとは誰も言わない。それよりも、食べていくことのほうが大事だと。センターを出たあとの夢が、織物をして家族と暮らす事だと言う。あらゆることで、常識が覆された。小学校中退の子対大学生の自分。自分は何なんだろう、と。織物センターの近所の高校生の子は、秘書になりたいと言った。学校へ行くと、将来の夢の選択肢が広がるのだなあと思った。でも、この子たちには選択肢はないわけで……

早紀さんは、ぜひまたこのセンターを訪問し、子どもたちに会いたいと何度も繰り返した。

＊3　織物センター：L&Pが運営資金を提供、VCAOが運営。DV被害の子を中心とした宿泊施設で、絣の布の織物を習う。現在16歳～18歳の21人の女の子がいる。

（カンボジア新プロジェクト担当　佐藤　葉）

ゴミを積んだトラックでは子どもたちが換金できるゴミを探す
円内はダイさんと早紀さん

カンボジアの現実……金で買う教育

前号にカンボジアでの近況を寄せてくれた大学生の浅石啓介君が、今回の調査中、コーディネートと通訳をしてれた。　彼は、今、恋人のダイさん(18歳)の高校教育の資金を出そうかどうしようかと迷っている。というのは、今ダイさんは9年生で進級のためのテストがあり、パスして10年生になっても学ぶことはこれまでの復習だと聞く。50ドル出せば飛び級ができる。早く卒業させたい。たった50ドルではないか。が、それは金で教育を買うことになる。なんでも金で動くことが、この国の許せないことのひとつなので、大切なダイさんの教育を金で解決しようとすることにためらいがあるというのだ。

金で動く教育にはもうひとつあり、12年生の終わりに卒業と大学進学のためのテストがある。貧乏な人が成績がよかった場合、金持ちがその成績を買い、自分の子を卒業させ、大学へ進学させ、やがては政府の役人になることもあるというのだ。それが政治を腐敗させる、と啓介君は正義感を発揮する。

金で動く教育。プノンペン市では、高校の授業料を毎日、先生に払うそうだ。その1日分が払えず中退する子が多いとのこと。ダイさんは、授業料が値上がりしたとき親からもらう金では授業料が足りなかったが、一生懸命働く両親に心配をかけたくないと、ゴミ山でゴミを拾って換金し、払ったそうである。小柄なダイさんだが、18歳とは思えないほどしっかりしており、しかも周囲の人々に細かく気を配ってくれた。

西湘ブランチ　カンボジアシルクでファッションショー

9月30日にひらつか市民活動センターの「センター祭り」が開催されました。西湘ブランチは、“カンボジアシルクのファッションショー”で、カンボジアの新しいプロジェクト「職業訓練センター支援」をアピールするために参加しました。

ファッションショーを思いついたのは、地球の木の総会の時に何人かの人が、カンボジアシルクで仕立てた洋服を素敵に着ているのを見てファッションショーをしたらきっと受ける！参加した人に何かを感じてもらえる！と思ったからです。

しかし当日は雨。人出が少なくて心配しましたが、地球の木のスタッフがモデルになり音楽に乗って、ブラウス、上着、スカート、スーツ、スカーフなどを着て披露すると、たちまち会場は一杯になりました。

クメールシルクチームの佐藤さんが、参加者にシルクの手触りを感じてもらいながら、カンボジアの状況やカンボジアシルクの特色を説明しました。「しっかり織ってあるのね」「光沢があってきれいね」と参加者の反応もよく、質問タイムも活況でした。ファッションショーの後の地球の木のブースは、グッズが大変よく売れました。カンボジアの少女たちの現状とプロジェクトの説明がいつもよりよく出来たと思っています。　（西湘ブランチ　坂下まさみ）

from Nepal

スニタ・タパ・マガル（19歳、右側）
大学2年生　環境学専攻
ススマK.C.（20歳、中央）
大学3年生　獣医学専攻

ネパールSOARSニュース　あ・ら・かると

★ユースクラブのリーダーたちが2月に来日！！

ユースクラブのリーダー2人が、「ネパール・ユース交流プログラム」に参加するため日本にやって来ます。（詳細は8ページをご覧ください）
ススマとスニタからのメッセージをお届けします。

地球の木会員の皆さま、
　ナマスカール！
　ユースクラブへの温かいご支援をありがとうございます。ネパールチームの方々やスタディツアーでネパールにいらした方々から日本のことを聞き、興味をもっていますが、実際に日本を訪れるのは初めてで、日本のことをもっと知りたいと思っています。
　私たちのグループ、Helpful Student Clubは、2002年に設立された組織で、若者の活性化と社会福祉を目標に掲げ、イマドール村で保健衛生や環境改善の活動を行っています。毎年、環境の日には、村の9つの区を回ってラリーを行います。また、児童の能力向上のためのプログラムを学校中心に行ったり、高校卒業資格試験（SLG）合格者たちを祝うイベントを毎年企画運営しています。これからもさまざまな活動を行っていきたいと思います。皆様にお会いできるのを楽しみにしています！

スニタ・タパ・マガル、ススマK.C.

★SOARSのニルマラさんがノルウエーへ研修に！

地球の木の皆さま
　ナマステ！
　8月9日にカトマンズを発ち、ノルウェーのフィヨルドの街ベルゲンに来ています。ネパールとノルウェーの共同プログラムに参加する機会を得、ベルゲン大学で猛勉強をしています。博士論文の課題である「NGOのアカウンタビリティ」に関する資料を集めたり、本を読んだり、講義やゼミに出る忙しい毎日を送ってきましたが、久しぶりの学生生活もそろそろ終わりに近づいてきました。12月3日にはネパールに帰国します。
　相変わらずネパール西部では、暴力事件やバンダ（ゼネスト）が横行し、マオイストが連立政府から脱退するなど、混乱が続いているようです。明るい未来がくることを願わずにはいられません。

愛をこめて、ニルマラK.C.

★頼もしいユースクラブのリーダーたち

ニルマラさんがノルウェーに研修に出かけて留守中の人材育成センターに、日本からのお客様……。でも、大丈夫。立派に成長したユースクラブのリーダーたちが、コーディネーター役を買って出てくれました！以下、中央大学の近藤さんからのメールの抜粋です。

13日間のネパール滞在を終え、昨日日本に帰国しました。このたびは、調査の仲介をして下さってありがとうございました。ユースクラブのみんなには何から何までお世話になり本当に楽しく充実した毎日を過ごさせていただきました。何もわからない日本人3人にとても親切に接していただき、地球の木のみなさんが、これまで多くの交流をし、信頼関係をお築きになってきたことを感じ大変感動いたしました。現地では、農村、都市周辺地域を中心に5つの女性グループと、他に協同組合や栄養プログラムを中心に行っているNGOなどを訪問させていただきました。

中央大学田中拓男ゼミナール32期　ネパールコミュニティ班　近藤麻美

（ネパールチーム　乳井　京子）

ネパール「幸せ分かち合いムーブメント」

お人好し「タマン族」を応援したい！

完成間近の図書室

今年度から本格始動した「幸せ分かち合いムーブメント」の現場は、ネパールの首都カトマンズから東へ約75㎞のマンガルタール村。そこには「タマン族」という先住民が多く暮らしています。タマン族はネパール全人口の5％という少数民族で、カトマンズ盆地周辺の山間地に住んでいます。チベット・ビルマ語系で、言葉は公用語のネパール語とは全く異なります。また宗教もチベット仏教です。独自の文化、社会規範を持って暮らしてきました。

ではネパールの主要民族は?それはインドから移住してきたインド・ヨーロッパ語系のヒンズー教徒「パルバテ・ヒンドゥー」です。この民族の言葉が国語となり、昨年までヒンズー教が国教として定められていました。インドの制度としてよく知られているカースト制も、この民族に由来します。現在の国王は、1769年にネパール全土を統一した「パルバテ・ヒンドゥー」のゴルカ王朝の子孫です。この統一以来200年以上にわたり、タマン族は国家権力の仕組みから排除されてきました。政治、軍、司法などの領域には関わることができず、海外に出稼ぎに行くことも禁止されていました。支配者層を支える底辺労働者として縛られていたのです。1854年の旧民法典によりタマン族はカーストの最下位「シュードラ」と位置づけられ、奴隷にされたり殺害されたりも許される民族とされました。1990年の民主化までは、組織化も禁止されていました。

タマン族はお人好しで、敬虔なチベット仏教徒。争いを嫌います。そのため他の少数民族のいくつかにみられるように、高位カーストと張り合おうという気概を持たずに生きてきました。それがヒンズー主要民族につけこまれ、搾取されるままになっていた原因だという学者もいます。この社会的な底辺化に加えて、もともと住んでいるのは山間地。耕地が少なく、灌漑も難しい不利な地形です。稲作には適さず、メイズ(とうもろこし)やヒエ、麦、ソバで補っています。それでも一年を通して食べていくだけの収穫はありません。そのため経済的にも最も貧しい民族のひとつです。でも明るい希望が生まれました。昨年の民主化のうねりにより、ネパールは王国からヒンズー国家でもなくなりました。まだまだ民主国家として安定するのには時間がかかるでしょうが、ぜひこの機会にタマン族の人々も、ネパールの対等な市民として、自分たちの声を反映させる力をつけてほしい。マンガルタール村の子どもたちがその役割を担えるようになったなら、どんなに力強いことでしょう。

さて、村では着々とプログラムが進んでいます。図書室もほぼ完成。高校進学のための奨学生も決まりました。タマン族の識字率や就学率の低さは貧困のせいだけではなく、母語の違いも大きいのですが（学校ではネパール語が使われているため）、たくましく勉強を続けてもらいたいです。11月末からの現地調査については、次号で詳しく報告します。

（ネパールチーム　関川　渓子）

奨学生に選ばれた11年生たち

from Laos

村の森の将来を担う“森林ボランティア”

稲刈りが始まる10月初旬、ラオスでは三日三晩大雨が降り続き、ここカムアン県内の村でも黄金色に米粒を実らせた穂は、強い風雨にさらされ、あちこちで横倒しになりました。その翌週に、JVCでは各村で森林ボランティアを対象に「森林管理研修」を実施しましたが、村から数時間かけて集まった参加者たちは、「自分の田も、全滅ではないけど雨にやられたよ。収穫が減るなぁ」など、大雨の話題が尽きませんでした。

「森林管理研修」には、9村から約20名の森林ボランティアが集まりました。ラオスでいう森林ボランティアとは、村長や副村長などと並ぶひとつの役職名で、村の森林や土地問題に取り組むリーダー的存在。JVCでは、村人が自分たちの森を持続的に利用していけるよう、この森林ボランティアの育成に力を入れています。村では数十家庭が共にひとつの森を利用しており、その森から、家を建てる木、道具を作る竹やラタン(籐)、食糧のキノコやタケノコ、薬草など、様々な林産物を得ています。今回の研修は、こうした森の林産物が村にどれ位あるか調査する方法を学ぶために行われました。

森に入っての実地調査は森林ボランティアの一人、カムデンさんが住むクワンクワイ村の森で行いました。村の中心から30分ほど歩いた森の奥で、樹種、木の高さ、太さを把握する作業を行い、森の濃さ(密度)を知るために何百本とある幼樹も一本一本数えました。同じ樹種の木でも、育ち方が違えば、計りかたも異なり、手間がかかる作業です。しかし村の“宝箱”の中を改めて知るようでもあり、近隣県から来た講師も「立派な樹木が残り、資源豊かな森ですね」と語りました。

家族が増え木材や農地の需要が増えているのに、村の周囲では工場建設や植林地拡大などで森林自体が減少しており、今後どう森を守っていくか、また今残っている森林からの林産物が、いかに村の需要を満たしていくかは重要な課題です。村の人々にとって森へ行くことは日常的で、その森の状態は誰よりもその村の人たちが分かっているものですが、研修では、それをさらに進め、実際にみんなで森を見てまわり、測り、数え、詳しく調べることをしました。また、各村から参加した森林ボランティア同士が、森が生活にどのように役立っているか、無限に使える林産物がどのように失われているか、失われるとどんな影響が起きるか、などを敢えて話す場も持ち、自分達の生活と森を改めて意識化する機会にもなりました。カムデンさんは、家族のための樹木や農地を増やしたい、という村の中の要望にどう対応していくか、頭を悩ませていたようでしたが、この森の豊かさを急激に失わせることなく、森を育てながら使っていく道を探るため、「村全体と話し合ってやっていけることがある。研修で学んだ話を村全体に伝えるようにしていく」と語っています。

（JVCラオス事務所　尾崎　由嘉）

森の特徴を講師と語りあう森林ボランティアたち

ブランチから

なんぶブランチ

なんぶブランチは2003年から毎年、磯子国際フェスティバルにネパールカレー、アジアングッズの販売や、ワークショップなどで参加してきた。今年は10月13日(土)、乳井さんをファシリテーターとして「世界がもし100人の村だったら」という本をもとに考えられたワークショップで参加した。

赤ちゃんをおんぶした若いお母さんから小学生、戦争を経験した女性まで、幅広い年代の25名が参加。席に着くや全員に小さなカードが1枚ずつ配られた。性別や住む地域、話す言語などが書かれた役割カード。先ずはハロー、ナマステ、グーテンタークなど、書かれている言葉でそれぞれあいさつ。同じ言語を話す人たちで仲間を探し、6つのグループを作った。しかし仲間が見つからない人が意外に多く、世界には多くの言語が存在することを知る。

次に豊かさに応じて3つのグループに分かれたところで飴が配られた。最も豊かな5人のグループに60個、中間層の5人に40個。最も貧しい15人にはわずか3個しかなく、どのように分ければいいのかとぼう然。不公平さを体感したあと、世界の２割の人が8割の富、食糧を占有していることをシャンパングラスにたとえて教わる。

今度は大陸の面積に比例した長さの紐で輪を作り、その中に入る。ぎゅうぎゅう詰めのアジア。ヨーロッパやアメリカ大陸はゆったり。人口密度が体感できる。
最後にカラーペーパーを床に並べて棒グラフを作る。1枚が1兆円。多い順にアメリカ、中国。日本は、ロシア、フランスと並んで3位。さて一体この金額は何を意味するのかとの問いに、軍事費、エネルギー代などの答えがあがった。（実は軍事費）

世界には64億の人々が住んでいるが、今回のワークショップでは、その人口を25人に縮めて、世界の多様性、格差、理不尽さを体感した。それぞれのゲームのあと、感想を求められ、小さな子たちも一生懸命考えて答えていた。参加者全員が発言してくれたのは初めてと乳井さんも感激。

（広報チーム　浜辺美英子）

秋の「地球の木カフェ」開催

「一度来てみたかったんです」「へぇ、ここが事務所なんですか」と部屋を見回す初めていらした会員の第一声。
3年程前、会員の方々が気軽に事務所を訪れ、出会いや交流のきっかけになればと始まったオープンオフィス、「地球の木カフェ」が9月26日(水)に開催された。事務所の入り口のドアを開け、一歩足を踏み入れた両側にはラオス、カンボジア、ネパールなどの支援地からのグッズが上から下までいっぱいに並べられ販売されている。ショールやバッグやアクセサリーなど、カラフルで、見るだけでもわくわくとしてくる。今回は、狭いながらも周りの壁などを利用して「ミニ写真展」も行われた。クロアチアに行った会員とチベットを旅行してきた会員が撮ってきた町の様子や人々の写真の展示である。仲間たちが撮ってきた写真だと思うと、情報の少ないクロアチアやチベットも何だか少し身近に感じられるのは不思議だ。

事務所の真ん中にある大きなテーブルでは、先客の何人かがおいしそうに地球の木カレーを食べたり、お茶を飲んだりしながら、スタッフたちと何やら楽しそうにおしゃべりをしている。テーブルの上に並べられ、販売されているクッキーやカステラなどのお菓子は、会員がボランティアで焼いて下さったものだ。狭い事務所には、地球の木の熱い想いがいっぱい詰まっている。時間をみつけて、是非一度訪れてほしい「地球の木カフェ」である。

（広報チーム　沼田由美子）

ほくぶブランチ

8月19日(日)には、ほくぶブランチが、初めての「地球の木カフェほくぶ版」を地下鉄「センター北」駅近くの「保育室めーぷる」で行った。地球の木元理事の小泉恵子さんがこの保育室の施設長および理事を務めていることから、同じところにある介護福祉施設の夏祭りに合わせて開いたもので、地球の木の話に熱心に耳を傾けてくれる方たちにも、たくさん出会うことができた。

また、10月初めには同保育室にて、「支援地の子どもたちの写真展」も催された。

地球の木連続講座

「一歩ふみ出そう 私のシンプルライフ」

地球市民教育チームでは、グローバルな課題を会員の皆様と共に考える機会を持ちたいと、今回、待ったなしの「地球温暖化防止」と「シンプルライフ」について、連続講座(全2回)を企画しました。

連続講座第1回目は、地球の木も出資している「未来バンク」の理事長で、長年環境や平和などのNGO活動にかかわり、「日本のアル・ゴア」と今引っ張りだこの田中優氏をお招きして、『温暖化防止』をテーマに講演会を行います。田中優氏は温暖化について詳細なデータを分析し、警鐘を鳴らすと同時に、私たちにできる様々な手段を、個人レベルで、また社会的レベルで提示してくださいます。個人の努力や忍耐ではなく、こうしたらもっとおトクというやり方を教えてくれます。電気料金のしくみから戦争と環境問題とのつながりまで、そうだったのかときっと目からうろこが何枚も落ちることでしょう。

第２回目は、私たち地球の木の出番。温暖化による影響を真っ先に受けるのが、“便利”な生活とは無縁の途上国の人たちです。私たちは環境保護を訴えながら、そこに暮らす人々のことは案外無関心です。地球の木プロジェクトチームが、アジアの支援地で見て感じた彼らの厳しく、しかし豊かなシンプルライフ（?!）の現実や、彼らの暮らしを危うくしている様々な問題について、広く途上国の視点から語ります。そして私たち自身のシンプルライフを参加者のみなさんと共に考えます。

この講座であなたの中にシンプルライフの灯がともったら、それがきっと世界を救う力となるでしょう。

（地球市民教育チーム　中野真理子）

グローバルeye

南北統一に向けた韓国の平和運動

理事長　丸谷士都子

南北首脳会談が7年ぶりに開かれた。同じ民族が分断された悲しみは深く、統一は朝鮮半島の人たちの切なる希望であるだろう。私たちも北と南の人々が自由に行き来できる日が早く来ることを願わずにはいられない。

地球の木は、北東アジアの平和を目的とする「南北コリアと日本のともだち展」に実行委員として参加している。この「ともだち展」を通して知り合った韓国のNGO「南北オリニオッケドンム」の活動を紹介したい。「オリニ」は子ども、「オッケドンム」は肩を組むという意味である。南北統一が実現し、子どもたちが出会った時、今のままでは子どもたちは肩を組むことができない。体格的にも、互いへの理解という点においても同等ではないからである。

「いまだ出会えない子どもたちが、いつか対等な立場で出会えるために、今できることを探求しつづけること」、これが南北オリニオッケドンムの目指すところである。北朝鮮の子どもたちのための豆乳工場や子ども病院の改修などの支援活動、南北の子どもたちの文化交流、そして平和教育活動を三本の柱としている。

「大切なのは、『統一』そのものを目的とする教育ではなく、平和を築いていく過程であり、統一した時、どのような平和な社会を創っていくのかビジョンを描くことである」というオッケドンムの熱い想いが活動の根底に流れている。

韓国の統一部が今年の南北首脳会談の後、国民1,000人を対象に行った世論調査では、今後の対北への投資拡大により、経済的な負担が発生する場合、「負担する用意がある」と答えている国民は45.8%であった。

東西ドイツが統一した時、経済格差は4倍だったそうだ。北朝鮮と韓国の場合は20倍にもなると言われている。この深い溝を埋めていくには大きな試練が待ち受けている。厳しい状況の中ではあるが、違いを認め合える子どもたちを育てる活動は貴重であり、真に必要とされることである。

活動日誌（9月～11月抜粋）

9月　1日　地球の木サロン「エッセイ修行・鶴見エスニックツアー」
4日　地球の木サロン「実践英会話」
5日　「幸せ分かち合いムーブメント」紹介（藤沢）
8日　地球の木サロン「アロマテラピー」
12日　地球の木サロン「Tea&Talk」
19日　第4回理事会
22日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
25日　第4回ブランチ連絡会「日本の食を考える会」（酪農家三友氏）
26日　地球の木カフェ
29日　「食べてみたいなよその国」ラオス料理講習会（ラオスチーム）（あーすプラザ）
地球の木サロン「バッチフラワーレメディ」
30日　平塚市民活動センターまつり出展・カンボジアファッションショー（西湘ブランチ）
10月1日~12日　地球の木写真展（めーぷる）（ほくぶブランチ）
3・4日　貿易ゲームワークショップ（WE21マネジャー研修）
6・7日　グローバルフェスタ出展（日比谷）
9日　マジカルバナナワークショップ（大正大学）
13日　磯子区国際交流フェスティバル出展・100人村ワークショップ（なんぶブランチ）
地球の木サロン「エッセイ修行」
16日　監査
17日　地球の木サロン「実践英会話」
19日　茅ヶ崎デポーにてグッズ販売（湘南ブランチ）
20日　小田原センターまつり出展（西湘ブランチ）
21日　バンバザー出展（相模ブランチ）
23日　第5回理事会
24日　第5回ブランチ連絡会
27日　地球の木サロン「バッチフラワーレメディ」
27・28日　横浜国際フェスタ出展（パシフィコ横浜）
28~11/4　ラオス調査
30日　ラオススタディツアー&ネパール新規報告会（西湘ブランチ）
11月 2日　「幸せ分かち合いムーブメント」紹介（善行）、
3日　地球の木サロン「エッセイ修行」
3・4日　大和市民活動交流まつり出展（県央ブランチ）
5~12日　カンボジア調査
7日　貿易ゲームワークショップ（WE21ショップみなみ）、地球の木サロン「Tea&Talk」
8日　東戸塚デポーにてグッズ販売
10日　地球の木サロン「アロマテラピー」
11日　鎌倉国際交流フェスティバル出展（三浦ブランチ）
14日　地球の木サロン「実践英会話」
15日　第6回理事会
17日　オルタ館フェスタ出展、　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
19日　貿易ゲームワークショップ（港北高校）
27日　第6回ブランチ連絡会
28日　地球の木サロン「実践英会話」
29~12/6　ネパール（幸せ分かち合いムーブメント）調査

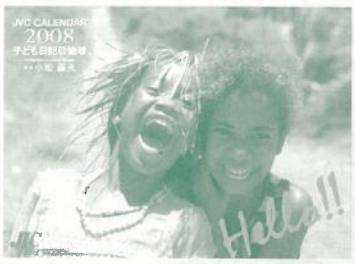
地球の木カフェ 2007クリスマスフェア

今年最後のオープンオフィス地球の木カフェです。ラオス、ネパール、カンボジアから最新グッズが入荷しました。素敵なスカーフもいっぱいです。プレゼントにもお役立てください。

日 時：12月21日（金）11：00～18：00
場 所：地球の木関内事務所

2008地球の木カレンダー「子ども日記@地球」好評発売中

カレンダーの準備はお済みですか？子どもたちのおおらかな笑顔が国も民族も超えて、その子が隣にいるように感じさせてくれる2008地球の木カレンダー。ご自宅はもちろん、プレゼントにもご利用ください。プレゼントカードをお付けしてお送りします。電話、ファックス、メールにて事務局までお申し込みください。



1部：1,500円
送料：310円（遠方は別途お問合せください）

地球の木連続講座「一歩ふみ出そう　私のシンプルライフ」

第1回　田中優氏講演会（未来バンク理事長）温暖化防止のための“もうひとつ”の選択

誰の目にも見えるようになってきた温暖化の影響。私たちは何をどう変えればいいのか、目からうろこの解決策を示します。

日　時：2008年1月20日(日) 13：30～16：00
場　所：横浜市民活動支援センター研修室2(桜木町駅徒歩5分)
参加費：800円（事前にお申込みください）
申込み：地球の木　事務局

第2回　メタボライフの裏側で“支援地のくらし、私たちのくらし”

温暖化の影響を真っ先に受けるのは途上国の人々。地球の木プロジェクトチームが途上国からの目線でシンプルライフを語ります。日本の私たちにできることは…

日　時：2008年2月3日（日）13：30～16：00
場　所：横浜市民活動支援センター研修室2(桜木町駅徒歩5分)
参加費：500円（事前にお申込みください）
申込み：地球の木事務局
＊詳しくはちらしをご覧ください。

事務局スタッフ募集！

地球の木では事務局スタッフを募集しております。
・週2回10：00～18：00　・年令不問
・給与は当団体規定・交通費全額支給・ワード、エクセル、メール必須・主にグッズの管理、販売をしていただきます。
詳細はホームページをご覧ください。

プロジェクト支援 年末募金キャンペーン

今年の年末募金は「ラオス村びと支援募金」「ネパール・デブラニ募金」「カンボジア・夢織り募金」「ネパール・幸せ分かち合い募金」です。
＊詳細は同封のちらしをご覧ください。

ネパール・ユース交流プログラム

国際交流基金の「市民青少年交流助成」を受けています

■パート1　ネパールのユースと語り合おう！2-Dayワークショップ in 江ノ島

ネパールの人材育成センターで活動する学生スニタさんとススマさんが来日します。若者たちのできることって？江ノ島で一緒に語り合ってみませんか？

日　時：2008年2月23日(土) 10:00～17:00
　　24日(日)　9:00～12:00（予定）
場　所：神奈川県立かながわ女性センター（江ノ島）
内　容：「若者の社会参加」をテーマにしたワークショップ、事例発表、交流会など
対　象：高校生・大学生・同年代の青少年
参加費：宿泊者　4,500円(宿泊と朝食を含む)
　　定員12名（先着順）
　　宿泊なしの参加者　1,800円（定員20名）
申込締切：1月18日(金)　＊宿泊なしの場合は2月15日(金)

■パート2　ネパールプロジェクト報告会・交流会 未来を築くネパールの　若者たち …地域を変えるのは私たち！…

日　時：2008年2月26日(火) 13:00～16:30
場　所：かながわ県民活動サポートセンター 604号室
対　象：地球の木会員ほか
参加費：500円（ネパールのチャイとお菓子つき）
申込み締切：2月22日(金)　定員：30名

■パート3　2月27日(水) 中央大学多摩キャンパスでも、学生交流会を企画中！

ネパールスタディツアー'08

地球の木プロジェクト「幸せ分かち合いムーブメント」の現場をカマル・フヤルさんと訪ねる。
参加型の村づくりを学ぶツアー。先住民タマン族の村で新しく始まった取り組みは、徹底的に村びと主体。自分たちの文化を守りながら生活向上をめざす村づくりを実際に見て体感しよう。

2008年3月27日(木)～4月3日(木)
訪問地：ネパール・カトマンズおよびマンガルタール村
参加費：24万円
＊詳しくはちらしをご覧ください。

ホームページのご案内

URLが変わりました。ぜひアクセスしてみてください。ラオス料理のレシピも掲載されています。
http//:e-tree.jp/

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど

R100 この印刷物は古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK™ 環境に配慮した「大豆インキ」を使用しています